先達から学ぶということ

樫尾直樹

ぼくが田丸先生に初めてお会いしたのは、いまからおよそ5年前のことです。11月のとある寒い日、研究室の知人に連れられて田丸先生の部屋へ参りました。当時ぼくは慶応義塾大学に通っており、東大の研究室のような場所に行くのは初めてだったので、すごく緊張したのを覚えています。ノックをしてドアを開け、なかに入ると、奥から痩身の田丸先生が出てこられました。

いまふりかえれば、そのとき院試の面接とおなじような質問を先生はされたと思います。ぼくが宗教学をやりたいという意志を伝えると、経済学から政治学へと遍歴を重ねてきた理由を尋ねられました。ぼくは、うまく自分の問題意識の一貫性をことばにすることができませんでしたが、問題関心の一端はある程度理解していただけたとは思います。

お会いするまでに先生のお仕事はできる限り拝読させていただきました。宗教学方法論と宗教学の歴史に関する論文が主でした。しかし、入院してから先生の問題関心とお仕事の深さと厚みとを知り敬服するとともに、そうした先生の学問的態度は、ぼくがこれから形成していくべきスタイルのひとつの重要なモデルとなりました。じっさい入院してから、ぼくは田丸先生を指導教授と仰ぐことになったわけですが、それによってその意識はより明確なものになりました。

その意識をあえて一言で表現するならば、「幅の広さ」ということばがもっとも適切ではないか、と思われます。「宗教学」や研究室の在り方を語られるとき先生がしばしば用いられる「間口が広い」ということばを、ぼくなりに言い換えたものです。この「幅の広さ」はまた宗教学研究室全体のもつ雰囲気をも言い表わしていると思います。水曜ゼミでの発表に端的に表れているように、諸「宗教」に係わる学問である「宗教学」の像が多様なのはある意味で当然なのですが、とはいうものの、田丸先生が主任教授として指導されてきた研究室の全体的なイメージと先生ご自身の学問的態度のイメージとは、厳密に言えば切り離して認識しなければならないと思います。

その意味でそうした「認識論的切断」を前提とするならば、ぼくは入院以来、指導教授としての田丸先生から何らかの教えを授けられたというよりも、むしろ、ひとりの学究の先達としての先生

から何かを学びとろうとしてきたと言えるかもしれません。

では先生から学びとろうとしてきたこととは、いったい何なのか、と問われれば、いまここで明確にすることはできませんとしか言えないのが実情です。もちろん先達から学びうることはたくさんあります。「学問的態度」と一言で言っても、諸先達の学問観が異なれば必然的にそれも千差万別です。とはいえ、やはりぼくはここでかなり舌足らずになりながらも、田丸先生の「幅の広さ」から学びえた（と思われる）ことを少しは語らないわけにはいきません。

たったひとりの研究者の成しうることが小さいことは歴史が教えてくれる通りですが、先達となるべくある学究者は、彼への追随者ではなく、継承者を何らかのかたちで残すことによってその事実を乗り越えようとするものです。むろん、ぼくはここで自分が先生の継承者であると言おうとしているのではありません。むしろ、ぼくが語りたいことは、研究者のカリスマや才能ではなく、研究者の「倫理」の在り方についてです。

その「倫理」とは、博識や方法の切れ味、理論展開の明敏さには納まりのつかない、研究者としてなすべきことばの作法であり、と同時に他者に対する身の作法でもあるものであります。ぼくが「幅の広さ」ということばに仮託したい真骨頂はまさにそのふたつの作法としての「倫理」です。

ぼくはいまこそ以上語ることばをもってはいませんが、それはあくまでも今後の自分の研究生活のなかで常に先達から学びとっていかねばならないとだけは言えると思います。田丸先生は、ぼくにとってこれまでも、そしてこれからもそのような先達であり続けるでしょう。